

豊川河口域アサリ稚貝の移植放流はじまる

豊川の河口域では、発生したアサリの稚貝を漁業者が採捕して、県内のアサリ漁場へ移植放流し、1～2年かけて育てた後に漁獲しています。当グループでは、豊川河口域で発生するアサリ稚貝の成長や生息密度を調べるため、毎月1回、干潟の決まった場所で砂や泥を採取しています。そして、その中から米粒ほどの大きさのアサリ稚貝を取り出し、殻の大きさ（殻長）を測定し、計数して生息密度を算出しています。最近、大雨による河川の増水や苦潮の発生によって、稚貝が大量にへい死した年もありました。しかし、令和8年度は6月まで大きな被害は確認されていません。

6月1日の調査では、アサリ稚貝は順調に成長していることが確認できました（図1）。また、稚貝の生息密度は1㎡あたり6,600個体で、平年値（過去5年間の平均7,700個体/㎡）に近い水準でした。

この結果を受け、6月30日に漁業者と協力して豊川河口域の資源量調査を行いました。その結果、平均殻長は11mmで（図2）、稚貝は豊川河口域の広い範囲に分布していることが分かりました。こうした状況から、豊川河口域で育ったアサリ稚貝の移植放流を7月15日から開始する予定です。

豊川河口域の豊かなアサリ資源を有効に活用することで、県内のアサリ資源の回復と漁獲量の増加につながることが期待されます。

漁場環境研究部 漁場改善グループ

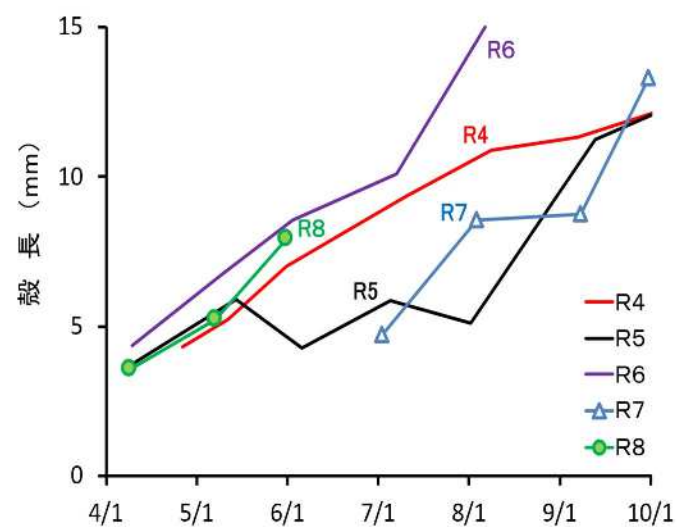


図1 六条湾におけるアサリ稚貝の成長

図2 6月30日調査時のアサリ稚貝
黄色のバーは10mm

大豆イソフラボンによる低成長ウナギの低減技術

内水面漁業研究所 内水面養殖グループ

ウナギ養殖では、成長の遅い「低成長個体」が全体の5～15%程度発生します。低成長個体は生産効率を下げるだけでなく、限られたシラスウナギ資源の有効利用を妨げる要因となっています。当グループでは、この課題の解決に向けた技術開発を進めており、水試ニュース595号（令和8年2月）では、養殖初期からイソフラボンを与えることで、低成長個体の発生割合を抑えられる可能性があることを紹介しました。

養殖現場からも、養殖途中に出てくる低成長個体に対してイソフラボンを投与し、成長を改善して出荷できるようにするための最適な方法の確立を求められています。

そこで、低成長個体にイソフラボンを投与したときに成長改善効果が得られる大きさを調べました。試験では、養鰻場で発生した低成長個体を大きさ別に分け、イソフラボンを添加した飼料を与える区（イソフラボン区）と、与えない区（対照区）を設けました。約2カ月間飼育した結果、試験開始時に25cmと30cmであった個体では、イソフラボン区の方が対照区よりも成長が良いことが確認されました。一方、40cm以上の個体では、明確な効果は認められませんでした（図3）。この結果から、イソフラボンによる成長改善効果は、一定の大きさまでに限られると考えられました。

今後は投与開始に最適なサイズ範囲及び投与期間などを調べて、さらに効率よく育てる技術の確立を目指します。

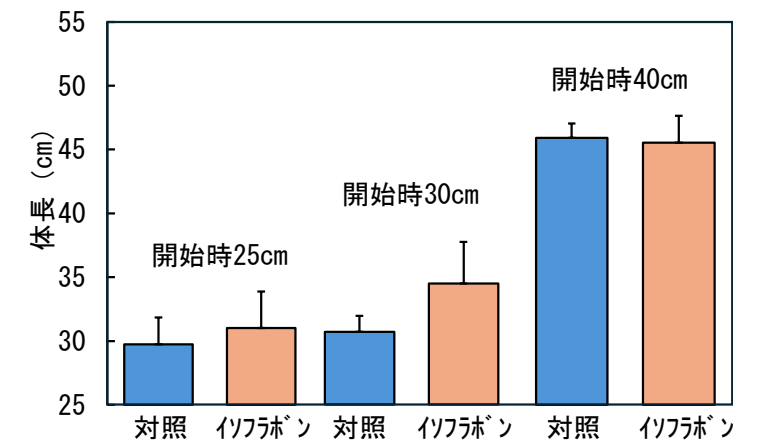


図3 試験終了時の平均体長

創刊600号を迎えて

水産試験場長

水試ニュースは、1976年6月の創刊以来、半世紀にわたり発行を重ね、このたび600号という節目を迎えることができました。日頃からご愛読いただいている皆様に、心より感謝申し上げます。

創刊から現在に至るまで、誌面は手書きからワープロ、そしてパソコンへ、白黒からカラーへと進化してきました。また、届け方も大きく変わり、現在ではウェブページやスマートフォンを通じて、手軽にご覧いただけるようになっています。さらに、内容や表現についても、漁業者の皆様に加え、広く県民の皆様に水産業への理解と関心を深めていただけるよう工夫を重ねてきました。

近年は、貧栄養化や高水温化など、創刊当時と比べ漁場環境が大きく変化しています。そうした中で、水試ニュースは、試験研究の成果や現場の最新の話題をわかりやすくお伝えする、身近な情報源であり続けたいと考えています。

これからも、水産業と皆様をつなぐ「架け橋」として、役立つ情報をわかりやすくお届けしてまいります。今後ともご愛読くださいますよう、よろしくお願いいたします。



場長 中嶋康生

